

ディスカバリーサービス Summon の検索ログ分析

大谷周平

九州大学統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻

1.背景

電子媒体を含めた図書館資料への効率的なアクセスを提供するツールとしてディスカバリーサービスの普及が進んでいる。九州大学では2011年6月より米 Serials Solutions 社製の Summon を導入している。本報告では Summon の検索ログを分析からユーザーの検索行動の分析を試みた。

2.検索ログの概要

2012年1月から12月までの1年間を対象として Summon の統計ツールから出力したデータを分析した。

延べ78,500のユーザーによりおよそ325,400回の検索(1日平均210ユーザー、890回)が行われている。九州大学からのアクセスは全体の66%程度であり、そのなかで明確に病院地区からのものと判別出来るアクセスは5%程度であった。ⁱ

3.検索語から読み取れる検索行動

無作為に4日間の検索ログを抽出し、分析を行った。全体で2500種の検索語が記録されていた。ISBN・ISSNによる検索、著者や主題によるファセットの絞り込みなどは、全体の5%程度に過ぎず、キーワードによる検索が大部分を占めた。日本語及び中国語韓国語の検索が全体の60%程度であり、さらにその70%が空白文字列で区切られていない一つの検索語として入力されていた。ⁱⁱ入力文字列の長さは平均で7文字、最大で61文字であった。

5.まとめ

単一の検索語だけを入力し、検索結果の絞り込みなどを行っていないユーザーがある程度の割合を占めていることが検索ログから推測される。このようなユーザーの利用実態にあわせて、検索結果の表示順の適正化やキーワードサジェストなど入力支援機能の強化していくことが必要であろう。また、ユーザーの検索意図や必要とする文献にたどりつくことが出来たのかは不明である。今後アンケート調査やインタビューを実施し、ログ分析との補完を行っていく予定である。

ⁱ 九州大学からのアクセスにはプロキシサーバー (Ezproxy)、学内無線 LAN サービス経由のアクセスが11%存在しており、病院地区からのアクセスの実数はさらに多いと推測される。

ⁱⁱ 日本語検索における検索キーワード平均数1.3、最頻値・中央値ともに1、英語ではキーワード平均数3.5、最頻値2、中央値2という結果が得られた。